

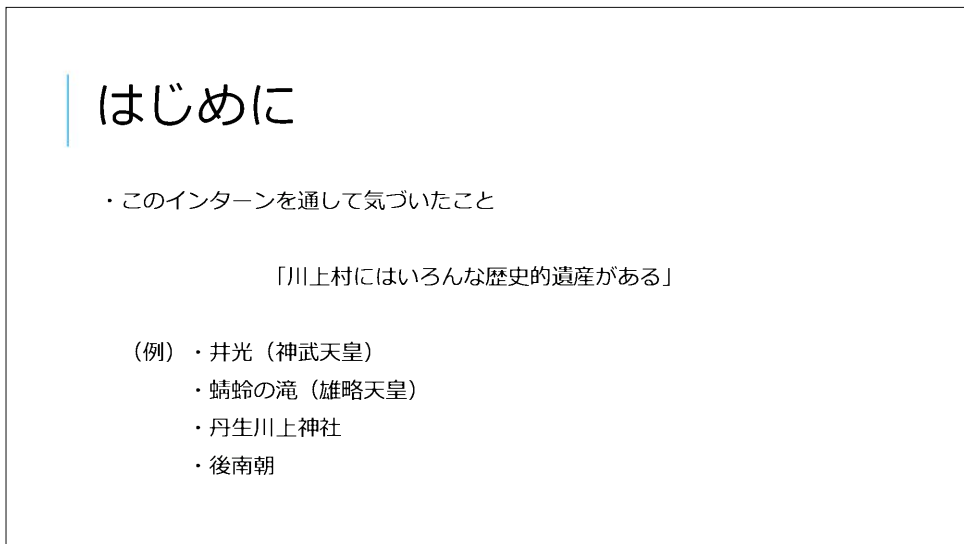
平成28年度川上村地域づくりインターンシップ報告書

関西学院大学経済学部 1年生 庄 宏樹

・提案、アイデア



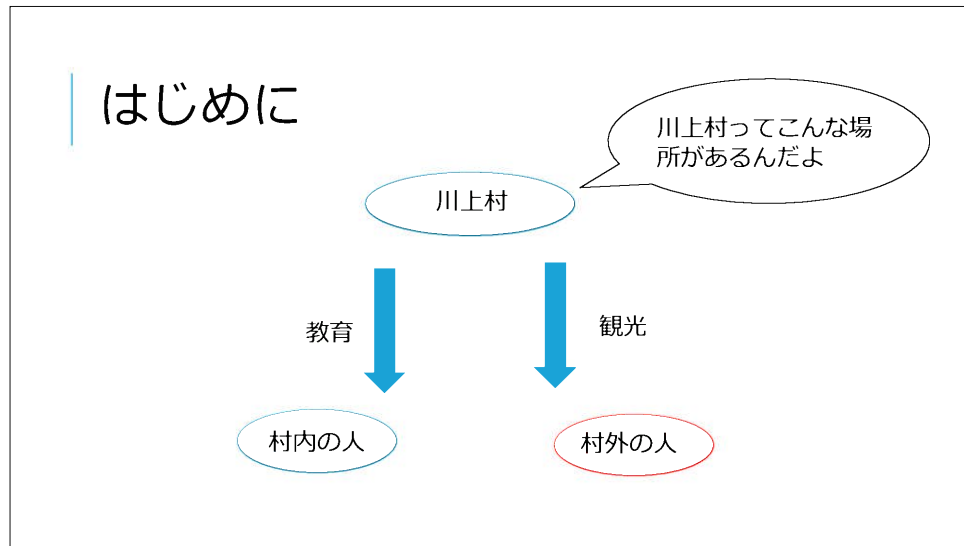
私は、「川上村の歴史的遺産の活用」というアイデアを提案したい。



私が、このインターンを通して気づいたことは、川上村はとても歴史のある村だということである。例えば、神武天皇のいらっしゃった井光や、雄略天皇のいらっしゃ

った蜻蛉野、丹生川上神社や後南朝史跡などである。

私はこれらの歴史的遺産をより多くの人に知ってもらうことで、川上村を元気にすることができると思う。



では、どうすればより多くの人に知ってもらうことができるのか。私が考えるのは、村内の人には教育を通して、村外の人には観光を通して、「川上村にはこんな場所がある」ということを伝える、というものだ。

## 教育

- ・「郷土史について学習」 + 「郷土の歴史的遺産に足を運ぶ」
- ・目的
  - 郷土について知り、誇りをもつ
  - 将来、郷土のことを忘れない
  - 他の市町村の学校の教育との差別化
- ・動機
  - 中学校時代の歴史の授業への不満

まず、教育である。その内容は、郷土の歴史を学習し、さらに実際に郷土の歴史的遺産に足を運ぶというものである。このことを通して、川上村の小中学生に「川上村ってこんな所があるんだ」と気づき、郷土に誇りをもってもらえば、子供たちが将来、仮に村外に出て行ってしまったとしても、自分の郷土を大切に思ってくれるのではないだろうか。同時に、そのような郷土史の授業を行っている学校はそう多くはないであろうから、他の市町村の学校の教育との差別化を図ることもできるはずである。

なぜ、私が郷土史の学習を重要視するのか。その理由は、私の中学校時代の歴史の教育に不満があるからである。私は、中学校時代を兵庫県の西宮市というところすごした。しかし残念ながら、私の同級生の多くは（私もふくめて）、西宮のことについてまったく知らない。ただ、学校がそこにあるから通っているだけで、西宮には何の思い出もない、という人がほとんどなのである。だから、「西宮って何がある所？」と尋ねられても、「住宅しかなく、何もない街だ」としか答えられないのである。しかし実際は、西宮には非常に長い歴史があるのである。日本書紀にも出てくる。江戸時代は良い日本酒をたくさんつくっていた。交通の要衝であった……。などというようなことを、西宮市の中学生は教えてもらっていない。だから、彼らは将来、西宮に何の思い出ももたず、市外へ出て行ってしまふ。

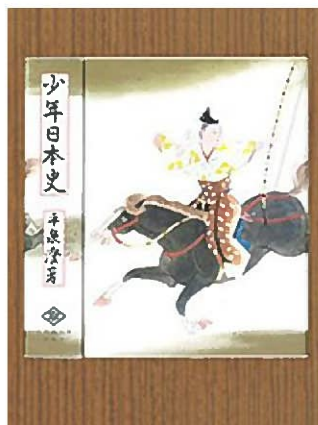
私は、このことを非常に残念に思う。歴史の授業の中で、西宮の歴史を学習して、実際にそれにまつわる場所に足を運ぶ、そういうことをしてもらいさえすれば、そういう授業を受けた生徒全員が全員とはいかないまでも、ある程度の数の人は、西宮という場所に対して誇りを持つようになるのに、と思う。

であるから、もしわたしが川上村の中学生なら、自分の郷土の歴史について知っておきたいと思うであろう。そして、郷土の歴史的な遺産に、実際に行ってみたく思うであろう。

## 具体案

- (例) ・神武天皇、南北朝時代の事前学習 →井光、吉野町に行く  
・万葉集、本居宣長の事前学習 →蜻蛉の滝に行く  
・南北朝時代、後南朝の事前学習 →後南朝史跡、吉野町に行く

では、どのような歴史の授業だと私であればうれしいか、ということをいくつか考えてみた。例えば、①神武天皇や南北朝時代を学習した後に、川上村の井光および吉野町に実際足を運ぶ。②万葉集や本居宣長について学習したあとに、蜻蛉の滝に行く。③南北朝時代と後南朝について学習した後に、吉野町や川上村内の後南朝史跡に行く、などである。



平泉澄『少年日本史』（皇学館大学出版部、2000）

<特徴>

- ・通史
- ・神武天皇、万葉集、本居宣長などについての記述

ただ、上にあげたような内容は（例えば、神武天皇、万葉集、本居宣長などについ


ては) 普通の歴史の教科書には詳しく書かれていないので、実際に上のような授業を  
するとなると、かなり難しいものがあるという意見も考えられる。ならば、参考書を  
使えばよいのではないだろうか。例えば、『少年日本史』という本がある。これは、通  
史の本である上に、神武天皇や万葉集、本居宣長などについての詳細な記述がある、  
というものである。この本を使って通史を学びながら、ところどころで川上村、ある  
いは、もっと広い視野で吉野全体にからめながら、最後には関連する歴史的遺産に足  
を運ぶ、とすればやりやすいであろう。

ともあれ、大事なのは「川上村にはこういう歴史的なものがある」ということを知  
る機会を与えることである。

## 観光

- ・由緒正しい神社  
→多くの人が訪れうる。
- ・実情  
「観光客にあまり知られていない」

丹生川上神社（上社）



では、次に、村外の人に観光を通して川上村の歴史について知ってもらうにはどう  
すればいいか、である。

多くの人が訪れうる川上村の歴史的遺産は、なんといっても丹生川上神社上社であ  
ろう。旧官幣大社という由緒正しい神社であるから、存在を知ってさえいれば、多く  
の人が訪れることは間違いない。

しかし、どうやら観光客には、この神社をあまり認知していないようである。この

インターン期間中に、川上村のファンで何回も川上村に来ている人と話をする機会があったのだが、その人でさえ、この神社の存在を知らなかった。これは由々しき事態であると言わざるを得ない。

ではどうすべきか。3つアイデアがある。

## 1つ目

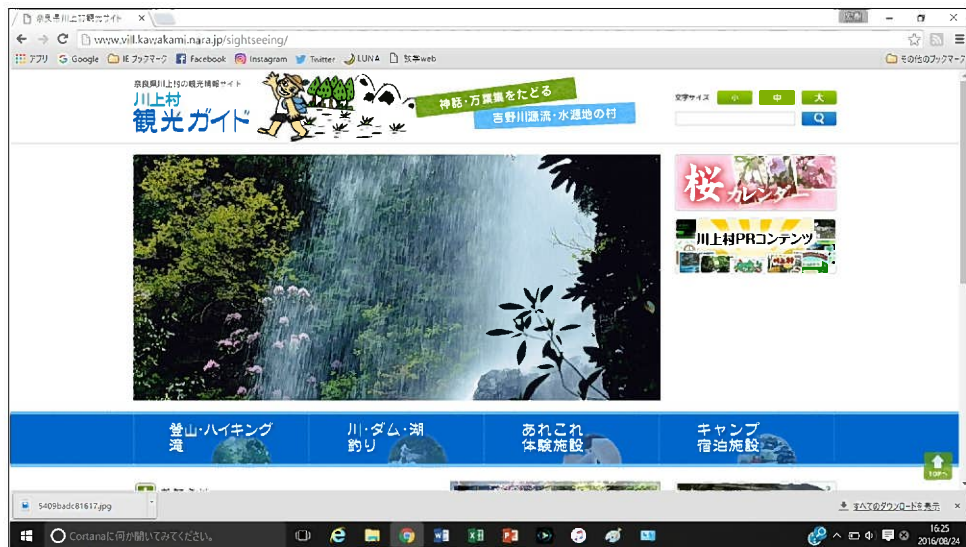
- ・道の駅、杉の湯に丹生川上神社のパンフレットを置く。

1つ目は、道の駅や杉の湯に、丹生川上神社のパンフレットを置くことである。道の駅や杉の湯でパンフレットを見たら、「こんな神社があるんだ、じゃあ行ってみよう」と思う観光客は少なくないだろう。

## 2つ目

- ・「奈良県川上村観光サイト」に丹生川上神社を全面的にうちだす

2つ目は、「奈良県川上村観光サイト」に丹生川上神社を全面的に打ち出すことである。



今の観光サイトには、「神話・万葉集をたどる」という記述があるが、川上村と神話・万葉集がどのような関係にあるのかは伝わってこない。川上村にはこういう歴史的遺産があるということが一目で伝わるデザインにすべきである。

## 3つ目

- ・下社、中社、上社の「三社巡り」の活用  
(例) バスツアー

3つ目のアイデアは、丹生川上神社下社・中社・上社が行っている三社巡りを活用することである。これら三社は、すべて吉野にあって距離的には近いにも関わらず、交通の便が悪いため、一日で回ることができない。そこで、三社巡りバスツアーのようなものを企画すればいいのではないだろうか。私なら参加する。

いずれにしても、川上村は「水源地の村」なのだから、水の神をお祀りする丹生川上神社をもっと宣伝してもよいのではないだろうか。

## まとめ

- ・川上村の歴史的遺産を、観光、教育両方面から活用する  
→川上村にとってプラス

以上のように、川上村の歴史的な遺産を活用すれば、観光客は増え、郷土のことを



理解する村内の子供も増え、川上村にとってはプラスなのではなかろうか。

・今後の川上村とのつながり

次に川上村を訪れる際は、観光で訪れたいと考えている。例えば、

➤ 蜻蛉の滝～金峯神社

(<http://www.vill.kawakami.nara.jp/sightseeing/play/%E8%9C%BB%E8%9B%89%E3%81%AE%E6%BB%9D%EF%BD%9E%E5%90%89%E9%87%8E%E5%B1%B1%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%82%B9/>)

➤ 武光橋～天誅組終焉の地

([http://www.pref.nara.jp/miryoku/aruku/kikou/ki/ki\\_10\\_summary.html](http://www.pref.nara.jp/miryoku/aruku/kikou/ki/ki_10_summary.html))

➤ 大峰山山上ヶ岳 山伏修行一日入門

(<http://www.vill.tenkawa.nara.jp/tourism/news/2485/>)

などを考えている。(最後の「山伏修行一日入門」は、天川村のプログラムだが、大峰山には柏木から登ることもできるので、一度このプログラムに参加してみて、改めて柏木から登りたい。)

・感想

○林業・地域づくりについて分かったこと

私がこのインターンに参加したのは、林業と過疎地における地域づくりに関心があったからです。よって、林業と地域づくりの現場を見ることのできた今回のインターンは、私にとって、とても有意義なものでした。

ただ、林業については、吉野林業がどのような課題を抱えているのかは認識できたものの、ではどうすればその課題を解決できるのか、また私には何ができるのかということになると、まったくわからない状態です。ですから、これから大学でそれらのことを考えていく所存です。

また、地域づくりについては、よく「ヨソモノの視点が大事だ」と言われますが、そのことが今回のインターンで、少しわかったような気がしました。

例えば、やまいき市後のディスカッションでは、学生から「ここはもっとこうすればいいのでは」というアイデアが結構出ていました（私は出せませんでした）。それらのアイデアは、何回もやまいき市を経験されている神保さんにとっては、新しい発想だったようです（学生がこのようなことを言うのはおこがましいようですが）。これをきっかけにして、やまいき市の運用が改善されれば、それは「地域づくり」と言えるのではないのでしょうか。

#### ○関心の広がり

私がこのインターンに参加したのは、林業と地域づくりへの関心からでしたが、2週間生活しているうちに、関心が他の分野にも広がっていきました。

例えば、郷土学習です。私は、今まで教育にあまり関心をもってきませんでした。川上村の歴史にふれたことで、郷土の歴史を学校で教えることが大切なのではないかと考えるに至りました。そのことが、最終日の報告会での提案につながりました。

地域づくりインターンは、いろんな分野に興味をもつきっかけとなる事業でもある

と感じます。

#### ○地域づくりインターンにおいて大切なこと

地域づくりインターンにおいて大切なことは、「住民との交流」と「ディスカッション」にあると感じました。

住民と交流することで、住民の生の声を聞けることがあります。このことが、地域づくりのアイデアにつながるがあると分かりました。

また、インターン生同士でディスカッションをして、思ったこと・感じたこと・気づいたことをシェアすることで、自分にはない発想に触れることができ、これもまた、新たなアイデアを生む土壌になりうると分かりました。

#### ○田舎・自分の地元・都会、それぞれの魅力への気付き

このインターンを通して、田舎・自分の地元・都会、それぞれに魅力があるということに気づきました。

田舎の良さは、人と人のつながりが強いことだと感じました。2週間のインターン中、川上の人々は皆、我々インターン生に親切にしてくださいました。気さくに挨拶をしてくださったり、川上村についてお話し下さったり、肉や魚、野菜をおすそ分けしてくださったり……。このようなことは、都会に居たら経験できません。

また、自分の地元の大切さにも気づけました。川上の人々が皆、盆踊りや神社、山や家屋などを大切にしているのを見ると、私も、地元のそれらを大切にしないといけな いと思わされました。

さらには、正直なところ、都会にも良さがあると思わざるを得ませんでした。都会には、いろいろな店があつて、交通手段もあることから、必要な物やサービスがすぐに手に入ります。川上村だと、そうはいきません。

### ○田舎の役場の職員の魅力

田舎の公務員というのは、なかなか面白そうな仕事だと感じました。そう感じた理由は2つあります。

1つは、住民との距離が比較的近いこと。例えば、盆踊りには職員のみなさんが大勢参加されていました。このようなことは、都市部の公務員だとなかなかできないことです。

2つは、多様な仕事が任されるということです。水源地課の今福さんは、保育園に行ったり、スズメバチを退治したりと、一見水源地と何の関係もなさそうな、いろいろな仕事をされているようでした。分業が基本の現代社会では珍しい仕事なのではないでしょうか。

### ○インターンへの提案

私は、今回のインターンでは、住民との交流の機会が少なかったように感じています。宿泊先が農家であったり、林業家の家であったりすれば、もっと住民と交流する機会が生まれたのではないのでしょうか。ハナレやもりもり住宅、シェアハウスもいいですが、インターン生同士の会話に終始してしまうので、交流が生まれにくいです。

私が川上村を訪れた理由のひとつに「単純に川上村を観光客として全力で楽しんで、川上村の魅力をも自分で発見したい」というものがあった。私は大学の教授から地域の観光を考えるうえでまず大事なことは、自分も一人の観光客として川上村での暮らし、観光、交流を全力で楽しむことが大切であると教えられてきた。そのため私はこの二週間、インターンシップ生として



イベントのお手伝いや村民の方々と交流をしてきた一方で、川上村を初めて訪れた一人の観光客として、川上村の自然やレジャーを全力で楽しんだ。川遊びや水源地森のトレッキング、ダムでのカヌー体験、盆踊り…。毎日のように体を動かしてたくさん笑ってこの二週間は筋肉痛に毎日のように悩まされた。



こうして私は川上村で二週間、一観光客として楽しく過ごしてみて何点か気づいたことや感じたことがあった。この報告書では私が気づいた気づきについてまず述べ、最後にそれらの気づきを踏まえた上での提案をしていきたい。

## 1. 観光客の視点からみた気づき

川上村の観光は普段の生活では触れることもない 400 年の大杉を見ることができたり、天然林の中をトレッキングできたりと、非日常体験としての「心理的満足感」はとても強いものが得られることがわかった。しかしその一方で、観光後に残る「身体的疲労感」も強く残る、ということを感じた。川上村は「山」や「川」など自然に触れる観光が多い。たとえばトレッキングやキャニオニング、川遊びや魚のつかみ取りなど、そのほとんどが体を使って楽しむものである。そのため、身体的疲労感も生まれやすいことが川上村の観光の特徴であると私は考えた。

私がもし川上村の住人であったら、観光客に「川上



村は楽しかった、でも疲れた～」という気持ちで川上村を後にしてほしくない。可能であれば「楽しかった、そして癒された～」といったように気持ちよく川上村を後にして欲しい。日帰り観光客、レジャー終わりの観光客にも、疲れた体に値段をかけず手軽に癒しを与え、さらに全体として川上村観光の満足度を高められるような仕組みがほしいと考えた。



## 2. 道の駅でやまいき市のお手伝いをしていた時の気づき

道の駅に数時間滞在して気づいた点があった。それは『休憩を求める客』が多いことである。道の駅を訪れた観光客に話しかけてみると「大阪へ帰るところなの」「これから山に行くの」「大台ヶ原に行く途中なんだ」と口々に話していた。そして私がふと気づいたことは、彼らが道の駅を訪れた理由は観光として楽しむためではなく、休憩、リラックスのための来訪である、ということである。

そんな彼らの「休憩したい」「リラックスしたい」という需要に川上村の道の駅はきちんと応えているのだろうかと疑問に思った。道の駅を改めてみると、店内は土産品が一面に並べられ、食事スペースとベンチは店外にあり非常に簡素なものであった。「土産品を購入してもらいたい」という提供側の考えが強くなってはいないだろうか。私は、現在の川上村道の駅が供給しているのは「土産品」「食事」がメインであり、観光客が一番に望んでいる休憩スペースが十分に用意されていないと考える。確かに現在、川上村内で多様な土産品を買う場所は道の駅以外には存在しない。そのため、土産品売



り場の必要性も理解できる。しかし、「休憩」「リラックス」を観光客が求めている以上、もう少しこの需要を考慮するべきであると私は感じた。つまり具体的には、「通過型観光客（＝休憩所として滞在するのみの観光客）」の多い川上村には、『短い滞在時間で』『リラックスできる』ものを提供することが望ましいと私は考えた。

## 3. 提案

上記に述べた川上村の観光の特徴、川上村を訪れる観光客の需要を踏まえたうえで私

が考えた案は「足湯 Café」を作ることである。

#### 提案理由

この「足湯 Café」を提案した理由として、

- (1) 温泉よりも時間をかけずに気軽に立ち寄れること
- (2) 手軽にリラックス効果が得られること
- (3) 「癒し」と「食」という欲求を同時に満たすこと

が挙げられる。

この「手軽さ」を足湯 Café では最も売りにしたいと考えており、そのため足湯自体の入浴は無料とすることを考えている。その代わりに café としての軽食代やタオルは別途お金をとる仕組みとすることで賄えたらと考えている。

#### 場所

本来ならば道の駅に作りたいと考えたのだが、新たに足湯スペースを確保するのは難しいと考え、代わりにもくもく館跡がふさわしいのではないかと考えた。もくもく館は国道沿いにあり、観光客も立ち寄りやすい場所である。また、近くにはあきつの小野スポーツ公園や蜻蛉の滝といった観光資源も多く、レジャー終わりの観光客の立ち寄りも期待ができる。そして複数の観光資源が近距離に集まることで、それぞれにより多くの集客を獲得することも期待できる。そのため私はもくもく館跡を候補場所として選んだ。

#### ターゲット

足湯 Café のターゲット客と考えているのは、休憩目的で訪れる観光客、レジャー終わりの観光客、村民である。休憩目的で訪れた観光客、レジャー終わりの観光客には無料で時間をかけず疲れを癒す施設として売り出すことで、集客が期待できるのではないかと考える。また、村民をターゲットに入れた理由として、やまいき市での気づきが関係する。てくてく館跡で行われているやまいき市をお手伝いしていた際、やまいき市を訪れた常連さん達が、その場にいた協力隊の方々や村民同士の会話を短時間ながらもとても楽しんでいる様子を目にした。しかし、せっかくやまいき市という人々が集まる理由があつて交流の機会が作られているのに、やまいき市周辺にはゆっくりと会話や交流を楽しめるような長時間滞在できるスペースはなく、村民の方々は買い物が終わるとそそくさと車に乗って帰って行くしかなかった。この状況を私は非常にもったいないと感じた。そのため、無料の足湯 café をやまいき市前のもくもく館跡地に作ることで、そうした村民の方々の交流のスペース、集会所的な役割にすることも可能なのではないかと考えた。

#### メニュー

Café のメニューとして私が考えたのは「その場で食べられるやまいき市の伝統野菜」



と「道の駅で扱われている商品」である。

「その場で食べられるやまいき市の伝統野菜」に関しては道の駅でやまいき市をお手伝いしていた際、「車で来ているから持って帰れない」「その場で食べたい」との意見を耳にしたことが関係する。そのため車利用の観光客にも伝統野菜を楽しんでもらいたいと思い、「その場で食べられるやまいき市の伝統野菜」を提案した。冷やしトマトや冷やしきゅうりでもよいし、地元の調理法でアレンジしたメニューとして販売することもよいと考える。

「道の駅で扱われている商品」に関しては、すでに土産品となっているので調理する必要がないこと、また「地域らしさ」がすでに反映されていること、そして一度食べてみることで「これ美味しかったからお土産にも買っていこう」「これはCaféでは食べられなかったものだからお土産に買っていこう」と、購買行動を促すことにもなるのではないかと考えたからである。ちなみに柿の葉寿司、ドクダミ茶、茶粥、かきもちは私の中で、川上村で食べて初めてその美味しさを知った特産物であった。新たにメニューを考慮しなくても、その地域でとれるもの、地域の伝統食など、「地域らしさ」が出ているものをメニューとして販売することがよいと考える。



また、Caféのメニュー以外にも手ぬぐいを販売してみることがよいと考える。私が川上村からいただいた手ぬぐいはとても可愛らしくて、気に入った土産品の一つである。足湯後に足を拭く用途で購入してもらおうこと、川遊びやハイキングの際に使ってもらおうこと、そしてお土産として持って帰ってもらおうことが可能であると考えた。





## 川上村らしさ

足湯 Café を訪れた観光客に、川上村らしさをどう伝えるか、私が考えたのは①吉野材を使った浴槽を使うこと（樽風呂とする等）②廃材となったヒノキ材をお湯の中で泳がすこと③お湯以外に、子供が楽しめるものとして吉野材の木くずを浴槽いっぱいにつめた「木くず風呂」を設置すること、の3点である。偶然川上村を訪れたような観光客でも足湯を通して吉野材に触れることができる。目で見て香りを嗅いで直に触れてみて。五感を通して吉野材の魅力を感じることで、吉野林業について興味を持つきっかけ・吉野材の魅力を理解するきっかけを作ることが可能となると考えた。



## 4. 今後、川上村と自分とのつながり方・できそうなこと

二週間のインターンシップが終わって東京に戻った今、そしてそれから何年か年月が経った後でも、私は目の前に国産材と外国産材の割りばしが並べられていて「どちらかを選べ」と選択を迫られた場合、迷わず国産材の割りばしを選ぶことができると思った。それは単純に質の良さという理由での選択ではなく、この2週間のインターンシップを通して、国産材の割りばしはどんな背景をもって切られ割りばしという形に至ったのか、国産の割りばしを使うことで微力ながらも日本の林業を活性化させることができると知ったこと、そしてこの私の選択が「日本林業にとってどんな未来を選びたいか？」ということにつながると知ったが故の選択である。私が今後、直接的に林業と関わることは難しいかもしれない。しかし私はこの2週間のインターンシップを通して吉野林業をはじめ日本林業のサポーターになることができた。日本林業の現状では林野庁の補助金制度を変えることは難しいかもしれない。しかし私のようなサポーターを作って国民の声・社会の支持を作ることによって間接的にはなるが、吉野林業を支えること、プラスの方向に変えていくこともできるのではないかと考えた。



## 5. 感想

まず私が川上村で過ごした2週間において、インターン生6人の仲間の存在がとても大きくありました。楽しむ時には全力で楽しみ、仲間がいたことで川上村での生活をより一層充実したものにする事ができたと感じます。一方で村について考えるとき、自分の考えが分からなくなってしまったとき、6人の仲間に頼れば何かしら新しい考えやアイデア、解決策にたどり着くことができました。私たち7人の個性や専攻している学問、住んでいる環境が違うからこそ達成できた2週間であったと感じます。



今回のインターンシップでは村内・村外に暮らす方、地域おこし協力隊のみなさんなど、様々なジャンルの方々と交流する機会があり、自分にとって新しい意見や考え方にたくさん出会うことができました。第三者という視点で川上村を見るときに必要な「多角的に物事を見る視点」を獲得する際に大きく役に立ったと感じています。

また、インターンシップ最終日にお世話になった方々に挨拶をしていた際、私が滞在していたのはたった2週間であったのに、親戚のような関係になれた方がたくさんいることに気が付きました。人口が少ないからこそ、人と人とのつながりが深く、それを大切にしている川上村の人々。当たり前のように存在する星空や川、大木、知らない人でも「こんにちは」を言い合える関係、人との深いつながり、東京にはないもの、川上村の魅力をたくさん見つけることができました。この2週間はたくさんのお出会い、そしてたくさんの学びを得ることができ、私にとって大変貴重な経験となりました。関わってくださったすべての方に感謝申し上げます。ありがとうございました。また必ず会いに行きます。

# 『平成 28 年度川上村地域づくりインターンシップ報告書』

奈良女子大学 生活環境学部 生活文化学科 2 年 中山穂南

## 目次

1. インターン参加のきっかけについて
2. 川上村の楽しかったこと・提案
3. 川上村とのつながり方
4. インターンシップの感想

### 1. インターン参加のきっかけについて

私がこのインターンシップに参加したきっかけは、大きく分けて3つあります。

- ◇ 奈良が好き
- ◇ 林業の世界を知りたい
- ◇ 2週間真剣に地域づくりについて考えたい

です。一つ目の奈良が好きという点ですが、私は前から、奈良が持つ歴史的趣はもちろん、奈良の数々のイベントや祭りが大好きであり、将来も奈良で働きたいと思っていました。そこで、奈良県でインターンシップがないかなと探しているときにこの川上村でのインターンシップを見つけ、大好きな奈良の南部の村の取り組みについて知りたい！と強く思いました。

二つ目の林業の世界を知りたいという点ですが、農業への興味から、林業との類似点や相違点などにも関心が出たからです。私は、子どもに農作業体験を提供する NPO 法人でボランティア活動をしています。その他、大学で農業の6次産業化を学んだり、実際に農家さんの生産現場の見学に行ったりする中で、農業への関心が高まりました。しかし、奈良と言えば昔から林業が盛んであったわけで、農業だけでなく林業についても知りたいな、と思いました。そして、性質は違うけれど、同じく生産・加工・販売というルートがあるのだから、何か発見があるのではないか、という思いで、このインターンに参加しようと思いました。

三つ目の地域づくりについて考えたいという点ですが、他の市町村の取り組みについて知識があるわけではないのですが、川上村はホームページを見る限りでも様々な取り組みを行っていて、それらの取り組みが実際どのくらい村づくりに影響を及ぼしているのか知りたいと思ったからです。また、過疎化や高齢化が進む中で全力で村づくりに取り組んでいる人々の思いや、実際に生活している村民さんとのつながり方などを現地で感じ、自治体の村づくりとはどのようなものなのか知り、自分自身でも、

その村づくりの良い点や、こうしたらもっと良くなるのでは、といったことを考えたいと思ったからです。

この三つ以外にも、純粹に川上村の自然を楽しみたいという思いももちろんありました。以上で、きっかけについての話は終わりです。

## 2.川上村の楽しかったこと・提案

私がこの2週間で楽しかったことを紹介したいと思います。また、実際に体験する中で感じたことや、提案についても書きたいと思います。

### ☆冷たく澄んだ川たち！

何とんでもやはり川上村の一番素晴らしいところは「水」だと思います。森の中もそうなのですが、特に感動したのは吉野川の支川である中奥川・上多古川・三之公川です。河川パトロールで巡ったのですが、車の中から覗いても底が見えるくらい綺麗ですし、実際に足をつけてみるとそれはそれは冷たくて、最高に気持ちよかったです。川に遊びに来ている村外の方も、川上村の川を選んで来た理由に「水が綺麗だから」とおっしゃっていて、本当に川上村の宝だと思いました。



### \*問題点\*

役場の水源地課の北澤さんに車中でお聞きしたのですが、駐車場がないのは由々しき事態だと思います。川上村としても、たくさんの人に川に来て欲しい！でもたくさん来たら道が混雑して村民が困ってしまう.....こんなに素晴らしい自然があるのに、非常にもどかしいと感じました。解決策として

- ◇ ヘリコプターの給油地として使っている土地を駐車場にする（北澤さんからそういった案があるとお聞きしました）
  - 問題点としては、あの広さだけですべての車を収容できるかどうかということです。車の台数を数えると、中奥川だけで約60台の路上駐車がありました。その上、観光客が来るのは中奥川だけではなく、後の二つの川についても考えなければなりません。
- ◇ 川から離れた別の広い場所に駐車場を作る、もしくは既存の駐車場の一部を専用にして、送迎車を出す。バーベキューの道具を積めるようなバスを用意する。
  - この案に関しては問題点がたくさんあります。

- ✓ 荷物を積めるくらい大きなバスを用意できるのかどうか
- ✓ 道がそこまで広くないため、大型バスが通れるのかどうか
- ✓ 泊まりで来ていたり、買い出しに行きたい人がすぐに車を使えない
- ✓ やはり不便になるので、観光客が減る可能性も考えられる
- ✓ コストに関しては、運賃を取ればよいと思うのですが、来村者が減って元が取れない可能性も考えられる

これらの問題点から、実現は難しいと思われます。

このようにアイデアを考えてみたのですが、やはり場所がないというのは難しいと感じました。

運転のできない私自身は、友達を連れて川上村の川に行きたいので、電車で行けたら素敵なのにな、とっております。バーベキュー目的の人だけではなく、私のように水遊びがしたいだけという人もいると思うので、そういった人向けに、予約制で駅からちょっとしたシャトルバスなどを出すのもよいのではないかな、と思いました。

## ☆大迫力の滝



↑蜻蛉の滝 虹が見えて幸せでした！

川上村の凄いところ二つ目はずばり滝だと思います。御船の滝・蜻蛉の滝・そして雨で行くことができなかったのですが明神の滝という大迫力の滝が、村内で三つもあるなんて凄いです。しかし看板が少なく、もっと村の至る所に看板を設置するべきだと思います。こう思ったきっかけは、アルポールかわかみの方に、「蜻蛉の滝はトンネルを出てすぐに曲がらなければいけないので、非常に入りにくく、わかりにくい場所にある。だからあまり観光客の方々が立ち寄っていない。案内看板を、トンネルの前に設置するべきだ。」とお聞きしたからです。蜻蛉の滝は本当に見る価値がありますし、付近には遊びやすい川や運動公園もあるので、非常に勿体ない事態です

これは滝以外の観光スポットにも言えることですが、もっと看板を設置して、何が近くにあるのかというのをわかりやすくすべきだと思います。

また、看板を見つけたのですが、その看板に「もくもく館」と書かれていたり、もくもく館について、ホームページに「休館中です」と表示されていたのを見て、取り壊しが決定しているのなら、看板もホームページもリニューアルすべきだと思います。ホームページのリニューアルの件は現在進行中だとお聞きしましたが、看板に関しても新しくし、もっとわかりやすくすべきだと思います。ホームページでのPRももちろん重要ですが、やはり車で走行中に一番目に入りやすいのは看板ですし、川上村に観光目的で来ていない人も、「そんなのがあるのか」と立ち寄ってもらえるようになるのではないかと考えます。



↑御船の滝 近くまで寄れて楽しかったです！

## ☆森の魅力



水源地の森や下多古村有林の他、様々な森を歩きましたが、どの森も非常に幻想的で、まるで物語の世界に迷い込んだかのように錯覚しました。また、想像もできないような長い時間を生きている木を見ると、なんだか自分の悩みがちっぽけに思えてきて、「精一杯生きよう」という力が湧きました。



↑水源地の森にて  
お気に入りの一枚です！

↑歴史の証人にて  
木の太さにびっくり！



↑こちらも水源地の森  
まるで物語の世界のようです。

☆盆踊り

盆踊りは、東部地区と東川の二つに参加させていただきました。二つの盆踊りに参加して思ったことは二つあります。

♪ 来る人来る人が知り合いでびっくり！

♪ お年寄りが意外と少ないなということです。まず一つ目ですが、出店をしている人はもちろん、来るお客さんも知り合いの確率が高く、「あの人も知り合い！あの人も！」という風に、終始驚いておりました。

しかしこれは、地域が一丸となって作り上げているからこそなのでしょう。これは、川上村はもちろん、人口の少ない村の良さだな、と感じました。村民の心がとても近くなって凄く安心感があると思います。

一方、川上村は高齢化が非常に進んでいるということで、もっとお年寄りが参加しているだろうと思っていました。参加する中で、地域のおじいさんやおばあさんと会話で



↑東川盆踊り

きるだろうと。しかし実際は、盛り上がっているのは若者だけと言う感じで、踊っているお年寄りの方々は見かけましたが、私は、出店など、運営のほうにも参加してもらおうほうが良いのではないかと思いました。参加者ではなく運営側に入ること、高齢者と若者との交流の場ができるのではないのでしょうか。そうすれば、区内でのつながりがより強化されると思います。



↑東部地区盆踊り

## ☆やまいき市

川上村が野菜も売り出そうとしていると知ったときは、大きな畑があるわけではないのに、どうしたことだろうと思いました。しかし、やまいき市のお手伝いをしたり、野菜を出荷しているおばあさんたちの話を聞いて、川上村だからこその取り組みだとわかりました。ここでまず軽くやまいき市についてまとめます。



- ◇ 場所→旧山幸彦のてくてく館前・役場の横の道の駅で出張販売も
- ◇ 販売商品→家庭菜園規模の畑で作った野菜・川上村特有の伝統野菜・魚介類・花 など
- ◇ やまいき便り発行
- ◇ 今後は、伝統野菜を価値化していきたい



私たちインターン生は、8/20 に実際にやまいき市のお手伝いをしました。まずは野菜を出荷している家に野菜を取りに行きます。その後店頭で並べて、市がスタートします。客層はやはり高齢者の方が多かったのですが、中には若い方も数人いらっしゃいました。おそらくほとんどの方が地元の方でした。

お手伝いする中で感じたやまいき市の良いところを挙げると

- ◇ 出荷元の方々のやりがいになる
  - 野菜を取りに行くときに、地域おこし協力隊の方々と会話することでコミュニケーションが生まれる
  - 地元の活動に参加しているという楽しさ
- ◇ 買う側も、地元の新鮮な野菜が食べられるし、買いに行く楽しみができる
  - シラスを求めて買いに来た人がいた
  - 一度に大量に買っていく人ばかり
  - 生産者との距離が近い

となります。一方、残念な面は、人通りが少ないため、村外の方々はあまり買いに来ないことが挙げられます。

「価値化する」ことについて私が提案したいのは、大学との連携です。私の大学には、奈良の食材を使って商品開発や販売をするなど、要するに奈良の食材を PR しているサークルがあります。このようなサークルとつながることで、PR もできるし、新しい調理方法などを発見できるのではないのでしょうか。そうすることで、伝統野菜の価値にもつながり、また、川上村の知名度を上げることもできると思います。

最後にどうしても言っておきたいのですが、やまいき市で買ったつるむらさき、とても美味しかったです！

## ☆木の生まれを知る体験

この2週間で一番自分の中で印象に残っているのは、やはり「林業」に関するお話や体験です。以下に、体験した内容や感想を紹介いたします。

### ・役場レクチャーで吉野かわかみ社中について聞く

インターン参加前から、名前だけは知っていた吉野かわかみ社中。レクチャーで上田参与に説明を受けたり、その後お時間をいただいて質問したりして、どのような取り組みをしてらっしゃるのか知りました。

私が特に気になったのは、林業の六次産業化です。やはり現状では、木材利用の減少・木材価格の低迷などから、林業は儲からない。しかし、生産だけではなく、加工・販売までを一つの組織でやったら収益が上がるのではないかと、そう思いながら、様々な質問をさせていただきました。吉野かわかみ社中も、今、六次産業化に取り組んでらっしゃるようです。

しかしお話を聞くうちに、簡単な問題ではないのだと気づかされました。一つの組織とはいっても、様々な団体が結集しているのです。皆が納得できるとは限らないからです。

また、インターン中に何度か耳にした、「林業は農業と違って食料じゃないからなあ」という言葉。食料ではない、というのは、要するに必需品ではないということでしょうか。そうなってくると、いかに木材を「必需品」として価値化するか、という視点もアリではないかな、と考えました。

吉野かわかみ社中は、林業従事者も増やそうと頑張っけてらっしゃいます。実際、新人も入ってきたと聞きました。このように、衰退していく林業を、「なんとかしたい」と立ち上がって頑張っている人々を見て、今は衰退していても、未来は明るいな、と感じました。

### ・実際に間伐してみる

これは本当に楽しかったです。いつも何気なく見ていた杉や檜。「まっすぐ立ってるなー」なんて思いながら通り過ぎていました。

しかし、玉井さんや早稲田さんのレクチャーのもと、実際に自分で木を選び、ロープをかけて切り倒すことで、いつも何気なく見ていた木が、こんなにも手間をかけて育てられていたということに驚きました。間伐は、とりあえず木と木の間隔が一定になれば良いと思っていたのですが、「先を読んで」、様々な要素を考慮して切り倒していたんですね。



↑切り口がなぜ二段になるのか初めて知りました。すっかりしました！

また、山守制度の話や林業の苦勞を聞いたり、林道を歩いたりして、林業の概要を知りました。木って、大きくなるまでは長いけれど、切るときは一瞬で元には戻らない。非常に神経を使う仕事だと感じました。また、体力がいるし、危険も伴います。そんな中、プライドを持って林業に携わっている人たちがいる。それなのに林業がどんどん衰退していくのは、本当に悲しいです。

#### ・加工工場の見学

吉野町にある木材加工工場のカネジュウさんを見学させていただいたり、社長の勢渡正丈さんのレクチャーをお聞きして、丸太がどのように加工されるのか知りました。特に驚いたのは、絞丸太の作り方と、化粧板の存在です。左の写真は、人工と天然の絞丸太について



のレクチャーです。絞丸太の床柱は見たことはあったのですが、あの模様は天然のものだと思っていました。でも実際は人工のものが多く、天然のものは奇形であると知り、驚きました。

また、木をととても薄く加工しているのを見て、それが、芯となるものに張り付けて使う化粧板というものであると知り、自分が今まで使ってきて、純粋な木だと思って疑わなかった物たちのどれ

かは絶対に私の思っていたような木材ではないと確信しました。

他にも、木の乾燥の話、年輪や柾目・板目などの話を聞いたり、目を疑うように高価な商品や、一見同じように見えるのに安い商品を見たりして、木って想像以上に深いな、と感動しました。

このように私は、今回このインターンで体験したり話を聞かなかつたら知りもしなかつたようなことをたくさん知ることができました。どの体験も本当に楽しく、そして、知っておかなければならないことばかりだと感じました。知らないまま人生を送ることがなくて自分は幸せです。

林業の苦労や努力、これを知らずして木製品を使うのは、あまりにももったいないと感じました。しかし林業は農業と違って、体験するにおいて「手軽さ」が無いように思います。実際に林業体験をすると、相当な関心や意識の高さが必要になってくるのではないのでしょうか。このままでは、一般の消費者に伝えることはできません。だから私が提案したいのは、「手軽に林業を知ることのできる体験」です。これは、私自身が川上村で林業を知って、「面白い」「楽しい」と感じたからです。他の人もきっと面白いと感じるはず！そう思ったから、この提案をします。

#### 「もくもく館跡地に、再び林業資料館を設立する」

もくもく館ですが、放火にあつて、取り壊しが決定したと聞きました。その跡地をどうするかは検討中ですが、林業資料館の復活を望む声もあるそうです。

様々な意見があると思いますが、やはり私は、消費者が楽しく林業を学べる施設を復活させるべきだと思うのです。

川上村は吉野林業で有名なのに、それを伝える施設が無いように感じました。せつかくの村の宝を伝えないなんてもったいないと思います。もちろんもくもく館があつた頃はそれが役目を果たしていたでしょう。

「箱物は失敗する」という意見もあると思います。でもやっぱり、インターンシップに参加した一大学生の意見としては、川上村に林業の施設が無いのは寂しい気がするんです。

狙う対象者は、川上村に観光で訪れた家族づれや、夏休みの自由研究のテーマを探している子供、社会見学先を探している小中学校、林業のことを知りたいなど思っている消費者などです。実際、もくもく館があつた頃は、社会見学で訪れる子供たちがいたようです。家族づれに関しては、近くに滝や子供が遊べる川、公園があるので、立地として好都合だと思うからです。作つたとして、どんなコーナーがあると面白いか考えてみました。

- ◇ 木製品が、木のどの部分を使ってどのように作られているのか紹介するコーナー
  - 板目と柾目がどの部分から取られているのか
  - 割りばしが主にどの部分から取られているのか
  - 白い柾目板は水を通しやすいため、おひつに用いる

- 白線帯という部分は水を通しにくいから樽に使う                    など
- ◇ 蝋人形によって、林業のリアルな現場を紹介するコーナー
  - 昔のパンフレットを見ると、そのようなコーナーがあったことが伺えます。
  - 私自身、博物館などの蝋人形のコーナーが結構好きで、どんな展示よりもわかりやすいと思いますし、楽しんで見ることができると思います。
- ◇ 木の種類や、種類による用途の違い
  - 杉は柔らかいため家具には向かない
  - 家具に用いられているのは主に広葉樹                    など
- ◇ 人工林の育て方を、イラストでわかりやすく紹介するコーナー
  - 多くの人が、杉や檜が勝手にまっすぐ太く育つと思っていると思います（私自身もそうでした）もちろん木の性質的にそういった面もありますが、それだけではなく、林家さんの苦労によって、あの美しい木が育っていること、また、吉野林業独特の密植や多間伐、長伐期などの苦労や手間なども紹介すると、吉野林業に対する見方が変わってくると思います。
- ◇ 林業の歴史的な変化を写真で伝えるコーナー
  - 昔の林業がどれほど過酷で途方もない作業であったかを伝えるコーナーです。私は昔の写真を、樽丸の職人である春増薫さんに見させていただきました。驚くことがたくさんで、とても面白かったです。歴史が好きな人ならば、非常に興味深いコーナーとなると思います。
- ◇ 木の香りを嗅ぎ分けるコーナー
  - こういった「ミニ体験」コーナーは小学生受けすると思います。また大人は、木の「香り」という価値に気づくはずです。
- ◇ 実際に間伐体験の申し込みもできる
  - こちらはそんなに頻繁にできるものではないと思いますが、月に一・二度、私たちがインターンで体験したような間伐体験を、一般の人でも申し込めるような窓口を作るのはどうかなと考えました。予約制で、団体や個人が申し込めるようにすると、やりたいという人が必ず出てくると思います。私自身、間伐体験が本当に楽しかったし、色々な発見がありましたので。

このように色々なコーナーを考えてみましたが、考えていてとても楽しかったです。

一番私が伝えたいのは、この施設を、「木の見方が変わる」施設にしたいということです。「木なら何でもいいでしょ」ではなく、「こっちの木の方がいいな」というふうに、消費者が選択できるようにする。日々の生活の中で、林業を、木を、森を思い出せるような、そんな体験ができる施設が良いと思うのです。

以上が、私のこのインターンシップにおける最大の提案でした。

### 3.川上村とのつながり方

- ◇ もう一度河川パトロールに参加したい
- ◇ 川上村のイベントにも積極的に参加していきたい
  - ボランティアとして
  - 体験学習への参加者として
- ◇ 家族・友達を連れて川上村に
  - 雨で明神の滝に行けなかった
  - 川で十分に遊べなかった
  - 蝉の声を聴きながらゆっくりお昼寝したかった
  - カヌーにもう一度乗りたい



→もう一度来て、すべて果たします！

このように、私が思う自分と川上村とのつながり方は、「これからも何度も川上村を訪れ、川上村の良いところを探し続けていくこと」だと考えます。2週間では知り切れなかった川上村の魅力を、どんどん発見していきたいです。

### 4.インターンシップの感想

私にとってこの2週間は、あまりにも早すぎました。毎日たくさんの楽しい体験をさせていただきましたが、それでもまだまだやりたいことが残っています。川上村には2週間では満喫しきれないほどの魅力がたくさんありました。

川上村の魅力は、「人」にもあります。この2週間に出会ってくださった方々全員が、私たちを温かく迎えてくださりました。そして皆さん強い意志を持って何



今まで食べたこんにゃくの中で一番おいしかったです！

かに全力で取り組んでいて、尊敬するとともに、憧れの感情を抱きました。また、語ってくださるお話もとても面白くて、もう一度あの人のお話を聞きたいな、と今でも思ったりします。村民の方々も、いきなり村に訪ねてきた私たちを優しく受け入れてくださり、質問にも丁寧に答えてくださいました。こんな方々のおかげで、毎日を温かい気持ちで過ごすことができました。家に帰ってきた今でも、またあの人に会いたいな、と考え

てしまいます。また川上村に訪れた時にお会いできたら嬉しいです。

また、この2週間は、自分の無知を思い知らされた日々でもありました。もちろんショックではありますが、しかし、このインターンシップがなかったら知ることができなかったのも、本当に参加してよかったと思っています。川上村での学習はもちろん、一緒に日々を過ごした6人の仲間たちにも良い刺激をもらいました。感謝しています。

私は奈良県が好きで、その気持ちは今も変わりませんが、川上村に関しては、「奈良県の中にある川上村」ではなく、「川上村」として大好きになりました。これからももっともっと川上村のことを知っていけたらと思います。

このインターンシップで出会った「場所」「人」「知識」は、私の人生の宝物です。最後になりましたが、お世話になったすべての方々、本当にありがとうございました。また会える日を楽しみにしております。

以上で、インターンシップの報告を終わります。ここまで読んでくださり、ありがとうございました。